

ジュルチャーニ演説から1周年－漏洩経路をめぐる怪

盛田 常夫

ウースドの大兄弟たち

総選挙での社会党の勝利、そして秋の大騒乱の原因になったバラトンウースドの演説から1年経った。各政党がこの1年の活動を総括するなかで、注目されるのは彼のジュルチャーニ演説を収録したCD漏洩の顛末である。

この小一時間の演説は総選挙直後に社会党議員を集めた内輪の集まりで発せられたもの。総選挙の公約とは正反対の緊縮政策実行の必要性を説くために、かなり乱暴な表現を使ったものだ。部外者を排除した集会だったにもかかわらず、この演説を収録したCDが流出し、「嘘をつきっぱなしだった」という部分だけが4ヶ月後の地方選挙直前に、メディアを通して繰り返し放送されることになった。これで野党のFIDESZが息を吹き返し、一部暴徒のTV局襲撃を初めとする騒乱状態が、1956年ハンガリー動乱50周年記念日まで続くことになった。

ハンガリーの週刊誌 *Élete és Irodalom* (略称ÉS) 5月25日付けの紙面に、ライナ・アッティラの長文の記事が掲載された。「ウースドの大兄弟たち」と題するこのレポートは、ジュルチャーニ演説の漏洩経路を追跡したものだ。この記事は大きな反響を呼び、社会党議員の多くはかなり浮き足だった。というのも、このレポートは内部からの流出を結論づけているからだ。「内なる敵」の存在に、社会党議員は混乱し、疑心暗鬼に陥った。

ハンガリーの「こそ泥」現象

残念なことだが、ハンガリーではいろいろなところで、実にさまざまな物が盗まれる。会社のパソコンや機器の盗難・紛失、製造工場の部品盗難などは日常茶飯事だ。病院でも廊下のテレビは鎖で繋がれているし、配膳車も錠前で手摺りに繋がれ、簡単に盗めないようになっている。トイレトーパーなどは簡単になくなる

ので、入院患者は自分で用意する。何とも面倒なことだが、これがハンガリーの現状だ。

明らかに、この種の「こそ泥現象」は市民的社会倫理が育成されなかった旧体制社会の遺産である。旧体制時代から「こそ泥」現象は一般的だった。「国の物は自分の物、自分の物は自分の物」という利己的な「共同所有」意識が形成され、公共物を盗むことに大きな心理的障害がなかった。やはり昨年、BBCがハンガリーのスタジオに制作委託している人気番組のマスターテープが盗まれ、実行者が巨額の金銭を要求する事件が明るみにでたが、これも内部者の仕業である。乗用車を盗んだ者が持ち主に買い取りを要求したり、盗まれた人が買い取りを提案したりする旧東欧世界で普遍的に見られる現象と同質のものだ。その買い取りに警察が絡んでいる場合もあるから、根は深い。

今、ハンガリーは社会党 (MSZP) と青年民主連合 (FIDESZ) の支持者間の対立が感情的なものに転化し、旧来の友人関係や家族関係すら気まづくなるという状態だ。とりわけ、FIDESZ支持の一部の活動家は過激化しており、さまざまな手段を使って社会党の情報を収集している。だから、ジュルチャーニ演説がFIDESZ陣営に流れたとしても、何の不思議もない。筆者は録音技術者周辺から流出したものと考えているが、ÉS誌のレポートは内部流出説をとっている。

流出経路

この種の漏洩には、現地会場の録音技術者や社会党の音響装置を担当している会社の技術者が漏洩に関与していると考えられる。

まず、現地で録音を担当していた技術者は、この漏洩事件を契機に精神に異常をきたし、現在ではコンタクトできない状態にあるという。さらに、社会党の音響装置技術者は党の責任者の指示によって、部外者へのインタビューを拒

否している。実はこの音響装置技術者は Omega Trading Kft から派遣された技術者で、この会社の社長フェレンライス・カーロイとは連絡がとれない状態になっている。

社会党の催事担当責任者であるブトル・クラエーラは漏洩事件にたいするライナ記者の質問にかなりパニック的な反応を示したというが、録音CDを保管している社会党幹部のガール・ゾルターン・ジュニアは記者の質問にたいして無反応だったという。ここからライナ・アッティラは、社会党指導部が何かを隠しているという心証を得たようだ。ジュルチャーニ自身、「漏洩経路の追求は不要」の指示を出したことも、この心証を強めている。

「内なる敵」は誰か

社会党担当者の不可解な言動から、レポーターのライナは、社会党内部の犯行説の裏付けに向かった。内部に実行犯がいるとすれば、それは誰か。ジュルチャーニ反対派で、ジュルチャーニを追い落とすことで、権力を奪回できると考えられるグループである。

ライナによれば、社会党の反ジュルチャーニ派は4つのグループに分けられるという。

第一は、防衛大臣セケレシュのグループ。これは旧党人派のグループであり、ジュルチャーニ後の権力奪取を狙っている。

第二は、スィリ・カタリンのグループ。ジュルチャーニは首相の座とスィリの大統領候補指名の相互協力関係を結んでいたため、このグループは敵対的でないとは判断する。

第三は、党の財務責任者プッチ・ラースローのグループ。彼とジュルチャーニとの間で個人的な確執があると言われており、追い落とし画策を排除できない。

第四は、メツジェシ退陣の後、ジュルチャーニとの首班候補投票で一敗地にまみれたキシユ・ピーテルのグループ。キシユは共産党青年同盟時代からジュルチャーニとはライバル関係にあり、このグループには古くからの社会党の有力者が集まっている。

ライナによれば、これら4つのグループのうち、一番可能性が高いのはキシユ・ピーテル周辺だと言う。最初にCDを入手したメディア関係者は、ハンガリーの最大のウェブサイト運営するOrigoの編集長ワイエルで、そのワイエルのCDの出所は、トチック弁護士事件当時、週刊誌 *Figyelő* の編集長を務め、トチック事件をスクープしたクレツ・ティボールだと断定している。もちろん、当人たちは否定しているが、クレツの会社 Krecz és Nandori Kft. はキシユが閣僚会議官房長官を務めていた時代に閣僚会議の仕事をもたらっており、キシユとの関係は深い。さらに、クレツのもう一つ会社 Kapcsolat.hu Kft. は、キシユに近い社会党議員バヤ・フェレンツが代表を務めるタンチッチ・ミハーイ財団が所有権を保有している。さらに、ワイエルとクレツは一時期、RTLテレビ局の仕事を一緒に行っていた仲だという。

キシユ・ピーテルはライナのレポートにたいして、告訴を含めた対抗措置をとると宣言しているが、今のところ訴状を出したという情報はない。真相は依然として闇の中だが、ジュルチャーニ演説漏洩ではいろいろな人物が、いろいろな思惑で関係しているはずだ。どこかの時点で、FIDESZにもその情報が伝わったはずだが、自ら種を蒔いたジュルチャーニも他の社会党幹部連中も口をつぐんでいる。

ジュルチャーニの地盤低下

閣僚会議官房長官で、ジュルチャーニの盟友で片腕のスィルヴァーシ・ジョルジュが更迭され、その後にキシユ・ピーテルが座った。ジュルチャーニ演説流出のニュースが駆けめぐっているこの時期の交代劇は注目に値する。キシユ・ピーテルのグループとの間で、何らかの政治的妥協を図ろうとしたのか。

各種の世論調査によれば、野党FIDESZの支持率は社会党の倍近くになっている。今、総選挙が行われれば、FIDESZの地滑り的な勝利となる。世論調査結果が発表される度に、社会党におけるジュルチャーニの影響力の低下が顕著になっ

ている。このままでは次の選挙に勝てないことは明らかだ。社会党議員はもはやジュルチャーニに遠慮する必要がなくなった。このまま、社会党の支持率が上昇しなければ、いつかの時点でジュルチャーニを切り捨てる。それが社会党議員の総意になりつつある。

ジュルチャーニとしては、ここは主流派のキシシュ・グループと妥協してでも、延命を図る必要がある。緊縮政策の効果が出て、医療保険改革が一段落すれば、世論の風向きも変わってくる。今は一番風当たりが強い時期だから、とにかく歯を食いしばって我慢する。これがジュルチャーニの戦略だろう。

他方、キシシュ・グループも国民に不人気の汚い仕事をジュルチャーニに任せ、成果が見えてきたところで党首交代すれば良い。何も慌てて、ジュルチャーニを追い落とすこともないというのが政治判断だろう。

シルヴァーシー家のスキャンダル

シルヴァーシ・ジョルジュは共産党青年同盟時代からのジュルチャーニの盟友で、かつ体制転換以後は事業パートナーでもあり、ジュルチャーニ政権を支える大黒柱だ。そのシルヴァーシの更迭は、シルヴァーシー家のスキャンダルによるものだ。

一つは、シルヴァーシの弟イシュトヴァーンが統合新設された国家医療センターの長に選任されたことだ。この新組織は国防省と内務省の病院に加え、2つのMÁV病院を統合したスーパー病院と通称されているもので、その最高責任者の公募からシルヴァーシ・イシュトヴァーンが選任された。公募による審査とはいえ、医療改革を先導している官房長官の弟を落とすのは難しかったに違いない。権力を利用していると言われても、言い訳できない。

二つは、もう1人の弟ピーテルにかかわるものだ。NPO財団の形式をとって数十億Ftの密輸にかかわったとして捜査を受けた財団にピーテルがかかわっており、さらに兄のジョルジュが管轄する公安庁の職員がこの財団の幹部に名を

連ねていることが暴露された。これが野党からの攻撃の標的になっている。

現在、西駅横の広大な敷地を再開発して、そこに政府施設を建設する計画がある。ジュルチャーニとシルヴァーシが主導するプランである。FIDESZはこのプロジェクトが二人の事業を助けるもので、とりわけシルヴァーシに公金を扱う仕事を与えてはならないと批判を強めている。身から出た錆としか言いようがない。シルヴァーシは官房長を更迭されたが、引き続き公安庁を管轄するポストに留まり、ジュルチャーニ政権を支えることになっている。

Nador '95 Kftの清算

本コラムでも何度か紹介したNador '95 Kft.が清算されるというニュースが伝わっている。マフィアまがいのビジネスを展開しながら、何の司法捜査も受けていない会社である。その代表者はサース・アンドラーシュだが、影の所有者は旧共産党の財務責任者だったマーティ・ラーズロー。ホルン元首相の片腕で、対ロシア債権のビジネスに加わるためにこの会社を創設したのだが、各種の醜いビジネスに加わったいわくつきの会社だ。

最大の仕掛けは、1998年のポシュタバンクからの1200万ドルの詐取である。当時、ウィーンの正体不明の商社BCL（現在イスラエルに逃亡したバラック・アロンと北朝鮮の外交官が設立した会社）と手を組んで、ポシュタバンクから1200万ドルを引き出し、この資金をポシュタバンクの増資に応募するスキームが仕組まれた。これは当時のポシュタバンク頭取プリンツが自らの立場を強めるために、ブダペストとウィーンのマフィアまがいの会社とつるんで行った奸計である。ポシュタバンク事件の一部として、この奸計も裁判の対象になっている。

さらに、この会社はホルン政府から3000万ドルの無線盗聴設備の納入を請け負ったが、オルバン政権になって契約不履行でキャンセルされた。ホルンとマーティの結びつきなしに、このような巨額の案件を受注できるわけがない。

この後、サース・アンドラーシュはアメリカに渡ったところで、密輸と詐欺容疑で逮捕・拘束された（2003年）。こういう経歴をもつサース・アンドラーシュだが、ハンガリーでは無傷のまま闊歩している。現在、開発銀行総裁ズデボルスキ・ジョルジュと不動産会社を共同所有していると報じられている。マフィアと政府の開発銀行総裁が共同事業を行っているというのも、ハンガリーのような体制転換諸国に見られる普遍的な現象である。その裏にマーティ・ラーズローがいることは間違いない。一部の旧共産党幹部連中が今でも甘い汁を吸っている。

警察の不祥事が続き、警察の最高幹部も更迭されたが、ブダペスト警察本部長ゲルゲーニイは、元内務大臣で警察庁長官を務めたピンテル・シャンドールと共同で旅行会社を所有していることが明らかになった。ピンテルもまた内務大臣就任時に、「マフィアが大臣に」と揶揄された人物だ。

ポシュタバンクの裁判は続いているが、元頭取プリンツが一度も拘束されないように、ハンガリーは大きな政治・経済スキャンダルを裁く能力に欠けている。政治家とマフィアが絡んだカネや女性問題には非常に甘い。

グリペン選定をめぐる収賄疑惑

今、社会党が反攻の機会をうかがっているものの、グリペン戦闘機をめぐる収賄疑惑がある。最近になって、スウェーデンのテレビはチェコがグリペン戦闘機導入を決定した時点で、オーストリアのロビスト、メンズドルフ・ポーリに巨額の贈賄資金が提供されたと報じたことからチェコ政界が大揺れに揺れている。このロビストの妻はオーストリア国民党幹部であり、オーストリア-ハンガリー友好協会の会長を務め、中欧のロビストとして知られた軍人分野の専門家だ。

スウェーデンの番組はチェコの戦闘機決定における秘密協定の存在を暴いたもので、ハンガリーには触れていない。しかし、メンズドルフ・ポーリの交友関係を見れば、ハンガリーが彼の対象外であったはずがないだろう。

当初、ホルン政権でグリペン戦闘機の導入を決めたが、FIDESZが入札なしの決定を受けられなかったために流産した経緯がある。その後、オルバン政権になり、専門家委員会がアメリカのF16戦闘機の導入を決定した。当時、オルバン政権の国防大臣だったサボー・ヤーノシュは形だけの最終決定委員会前に、専門家委員会の結論を公表したが、内務大臣ピンテルが主催した最終決定委員会で、専門家委員会の結論が覆され、グリペン導入が決定された。この時、オルバンは一度委員会を休憩させ、休憩後の会議でグリペン導入が唐突に決まった。明らかに、オルバン周辺に別の力学が働いていたと考えられる。社会党はここを突けば、現在の劣勢を転換できると考えている。

ただ、複雑なことに、社会党のメツジェシが首相になって、グリペンの機種や支払い方法が変更され、スウェーデンのSAAB社に支払う金額が倍に膨れ上がった。この変更によって、メツジェシ周辺にそれ相応の収賄があったことも排除できないから、事は簡単ではない。

与党社会党と野党FIDESZは、それぞれの思惑で国会内にグリペン導入にかんする調査委員会を設置することに同意した。社会党はオルバンの収賄疑惑を、FIDESZはメツジェシの収賄疑惑を暴こうとするだろう。このような場合、ハンガリーでは痛み分けになるケースがほとんどだが、もしオルバンがカネを受け取っていたとしたら、FIDESZに大きな打撃となるだろう。今後の成り行きが注目される。

このような大スキャンダルの影に隠れているが、トチック事件の主役トチック・マルタの民事裁判で一審判決が下された。「利子を付けて8億Ftを返済すべし」という判決である。すでに4億Ftは社会党とSZDSZに渡っているが、何故か大小のさまざまなスキャンダルのうち、この裁判だけが息長く続いている。大きな犯罪を見逃し、小さな犯罪に目を光らせるのもハンガリーらしい。簡単な事件だけ扱うのではなく、難しい大事件で名判決を期待したいものだ。

（関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい）